

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 井上 貴恵

スーフィズム（イスラム神秘主義）の初期の展開においてイスラーム教の枠を外れるような言説によってスーフィーたちはそのイスラーム性に嫌疑を受けることがあったが、アブー・ハーミド・ガザーリー（1111年没）に至るスーフィーたちの尽力により、教学的正統性を認められるようになった。12世紀はスーフィズムがイスラーム諸学の中で重要な位置を占めようとしていた時代である。この転換期にイラン南部で活動したのがルーズビハーン（1209年没）であり、12世紀を代表するスーフィズム思想家の1人である。アンリ・コルバンは、ハッラージュ（922年没）からアフマド・ガザーリー（1126年没）を經由しルーズビハーンらに至る潮流を「イラン的スーフィズム」と名付け、ルーズビハーンを酔語（神秘体験時に発せられる特殊な言語表現）と愛の議論を特徴とする神秘家として叙述した。このようなルーズビハーン像は、一定の批判は寄せられつつも基本的に今に至るまで受け継がれている。

本論文は、コルバン以来の通説がルーズビハーンの限られた著作に立脚している点を問題視し、コルバンが着目した『酔語注解』、『愛する者たちのジャスミンの書』以外をも参照し、前記二著作についても新たな視点で捉え直すことでスーフィズム思想史におけるルーズビハーン的位置付けを再考することを目的にしている。40冊を超えるルーズビハーンの著作が扱う領域は多岐に亘るが、本論文が注目したテーマは酔語論（第2章）、修行論と預言者・聖者論（第3章）、愛の理論（第4章）であり、前記二著作に加え『神秘の開示』、『聖性に関する論稿』、『靈魂たちの清泉』が分析の対象になっている。これら三章での議論によれば、ルーズビハーン思想の根底にあるのは、太初の時に預言者・聖者として神によって選ばれたというエリート意識であり、個人的な神秘体験により得られた、自分自身もそのような存在であるという自覚が彼の思想の出発点になっている。酔語はこのような選良による表現形態の一種であり、選良のみが神的愛に至ることができ、修行論においても最高段階に到達できるのである。これら三章での議論に基づき、ルーズビハーンが「イラン的スーフィズム」の枠組みには収まりきれないと結論づける著者が新たに注目したのは、スーフィズム思想史上最大の神秘哲学者イブン・アラビー（1240年没）との思想的連続性である。この問題を扱う第5章によれば、神秘的ヴィジョンによって預言者・聖者としての自覚と神と自己の存在論的連関の意識が得られることや人的愛を神的愛と連続させることなどで両者は軌を一にしているという。

全体的に論旨の提示方法に改善の余地があった、訳出の仕方についてももう少し配慮するべきであった、クルアーン解釈学に関する著作にもっと目を配ればさらに論考が深まったのではないか、といった指摘はあったが、文献学的に「イラン的スーフィズム」という枠組みを相対化した上で、ハッラージュとイブン・アラビーをつなぐ存在としてルーズビハーン思想を再規定したことはスーフィズム研究史に対する大きな貢献と見なしうるものであり、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。